

## いわゆるチャペル事件について

鈴木勇一郎

### 一、事件の評価をめぐって

「チャペル事件」とは、一九三六年四月二十九日に立教大学チャペルで開催された天長節の祝賀式で、当時の学長木村重治が祭壇の下で教育勅語を奉読したのは不敬であるとして、校友や学生などから攻撃を受け、辞任に追い込まれたというものである。

木村は、立教学校を出た後、アメリカに留学し、帰国後、いくつかの学校で教職に就き、一九三二年から立教大学学長を務めていた。

この事件は、立教史研究において、次のように評価されてきた。

例えば、一九七四年に刊行された『立教学院百年史』

では次のように記している。

チャペル聖壇の下段で教育勅語を捧読したのは不敬である、という非難が配属将校に使囃された一部学生・校友の間から起って、その責任を取ったものであつた<sup>(1)</sup>。

ここでは事件を、基本的に戦時体制に向かう中で起きた不敬事件の一環として位置づけ、その背後に配属将校をはじめとする軍部の存在を示唆している。だが、同書では特にその根拠を示しているわけではない。

また、戦時期の学長の日記を翻刻し、二〇一三年に刊行した『遠山郁三日誌』の解説では、次のように評価している。

（チャペル事件は）学内の派閥争いの側面を持って

いたとも見られるが、事件収束後に、「御真影」と教育勅語謄本の「下賜」申請がなされた点から、今日では「不敬事件」の一つと考えられている<sup>(2)</sup>。

ここでは「学内の派閥争いの側面」を持っていたということは認めつつも、基本的にはその内容については検討せず、やはり戦時体制に向かう中で起こった「不敬事件」と位置づけている。

もちろん、当時の時代状況を考えれば、こうした性格を持つていたことは確かだ。だが、前後の状況を考え合わせれば、事件の性格はそう単純に位置づけられるものではない。

## 二、小島茂雄「学位詐称」問題

実は、チャペル事件は突如として発生したわけではない。当時、直接の発端とされたのが、その直前に起こった小島茂雄文学部長兼中学校長の解職問題だった。

木村学長排斥運動を伝えた新聞の報道は次のような調子だ。

立教大学では文学部長兼立教中学校長ドクター・オプ・フィロソフィー小島茂雄氏が五月一日付辞任の形式で突如解職されたことから校友、学生間に動揺を生じ、学生はまだ自重しているが校友一部有志の

間に立教学園肅正連盟が結成され、小島氏復職、学園肅正の運動が起こされている<sup>(3)</sup>。

小島は、立教中学校、立教大学卒業後、アメリカに留学し、帰国後、立教大学チャブレンや立教中学校長、大学文学部長を歴任した人物である。

事件は、小島が持っていると称していたドクター・オプ・フィロソフィーの学位が詐称との疑惑が持ち上がり、辞職に追い込まれたというものだった。

ここで紹介した記事は一九三六年五月一三日の『東京朝日新聞』だが、この記事では木村学長排斥事件の発端は、小島解職問題にあつたとするのみで、「チャペル事件」については全く触れられていない。当時、東京の多くの新聞が、木村学長排斥運動について報道しているが、いずれもこの小島解職問題に力点を置いて伝えており<sup>(4)</sup>、チャペル事件について触れる場合でも、あくまでも小島解職問題と関連して説明している<sup>(5)</sup>。

すると、まず小島解職問題がなぜ持ち上がったのかを考えていく必要だろう。小島の疑惑の真偽は詳らかではないが、このことが殊更に問題化されたのは、木村重治学長による策動との見方が、一般的だった<sup>(6)</sup>。

具体的には、木村がこの年に予定されていた学長改選で、小島に取って代わられることを恐れて攻撃に出たものと見られていた<sup>(7)</sup>。

だが、中学校長や文学部長として実績を積んできた小島を支持する校友や学生らは、こうした木村学長の姿勢に反旗を翻し、小島の復職と木村の学長辞任を求めて「立教学園肅清同盟」を結成して活発な運動を展開した<sup>(8)</sup>。これに対して木村学長は辞職を拒んでいたが、七月には大学生八百名がストライキを決行するなど<sup>(9)</sup>、事態が大ごとになる中で、遂に辞職に追い込まれた。

要は、学長の椅子をめぐる校友や学生を巻き込んで起った、大学内における派閥抗争であった。

### 三、『帝都大学評判記』をめぐる

だが、これだけでは、なぜこの時期にこうした派閥抗争が目立つようになってきたのか、よくわからない。

そこに至る事情を解説した文献として、一九三四年に出版された『帝都大学評判記』がある。

著者の大村三郎によると、当時の大学の教育方針や制度や内容の問題点を、あえて指摘することで、その改善につながることを期待して著したものだという。

具体的には、早稲田、慶応義塾、明治、日大、立教、法政という、当時の東京にあった私立大学の特徴やその問題点を解説している。

この本の中で立教大学は、「野球部を除いた立教は、

残念ながら誇称すべき何もものをも持っていない」とか、「ミッシヨン・スクールの常として覇気を欠き、学生一般の気風がイージーゴーイング」というように<sup>(10)</sup>、辛辣な評価をされているが、これは何も立教に限ったわけではなく、他の大学に対してもこうした調子である。つまり、歯に衣着せぬ筆致によって、当時の東京の大学の現状と問題点を明らかにすることを目ざしたものであった。

注目すべきなのは、立教大学では「内部には常にごたごたが絶えない」として、当時起りつつあった学内抗争についても詳しく取り上げていることである。同書を基に、立教大学抗争の経過を、筆者なりに要旨をまとめると次のようなものになる。

立教大学では、学長を務めていた元田作之進が、一九二三年に日本聖公会監督として転出すると、杉浦貞二郎がその跡を継いでいた。元田は、アメリカに留学後、長らく立教中学校長、立教大学長を務めた聖公会の聖職者であった。

一方、杉浦は、「一徹な学者肌」の人物であり、研究活動に熱心な人物だったが、その神学的立場は聖公会から見ると異端的なものであり、ミッシヨンからの信用は元田に比べると低いものだった。

これが影響したのか、杉浦は長らく学長事務取扱のままであり、正式に学長となったのは、ようやく一九三一年と

なつてからであつた。杉浦は文学部長を兼ね、久保田富次郎が商学部長という体制で、大学を運営してきた。

だが、こうした状況に杉浦は満足していたわけではなかつた。

杉浦が最初に目を付けたのが、商学部長久保田富次郎だつた。久保田は、元田の「直系」であり、杉浦にとつて目の上の瘤だつた。

そこで杉浦は、立教の卒業生で、当時長崎高等商業学校校長だつた木村重治を、立教に呼び戻し、商学部長に据えることを画策した。木村自身も校友会会長松崎半三郎に対し、猛烈に復帰運動を行った。こうした動きが功を奏したのか、久保田は商学部長を辞職し、代わつて木村が、商学部長となつたのである。久保田を追い出すことは、元田系を立教から排除することでもあつた。

こうした動きに神経をとがらせたのが、アメリカ聖公会ミッシヨンだつた。杉浦や木村、松崎といった人物はいずれも聖公会の聖職者ではない。そこでミッシヨン側のインシアティブで、杉浦を文学部長から外し、聖職者であつた中学校長小島茂雄に文学部長を兼任させたのである。もちろん、杉浦は小島を快く思わず、陰に陽に嫌がらせをした。

一方、商学部長となつた木村は、杉浦のロボットとして動くことを潔しとせず、自ら学内行政に手を出すようにな

り、その過程で予科長小林秀雄と衝突するようになった。さらに木村は小林だけでなく、杉浦学長や小島文学部長など、学内の要職者を次々と攻撃した。杉浦にとつては飼犬に手をかまれたようなものだったが、木村は、松崎半三郎校友会長を味方につけていたので、次第に発言力を増していった。

一九三二年七月、木村は松崎に働きかけて、軽井沢にいたライフスナイター総長に臨時理事会を開かせ、杉浦学長、小林予科長らの解職と、自らの学長就任と商学部長兼任を決めさせたのである。

事実上のクーデターによつて権力を奪取した木村は、松崎校友会長に近い職員を学内の要職に据えるなど、自らの体制固めに躍起となつた。

この状況に危機感を募らせたのが、一部の校友たちだつた。彼らは、木村とその背後にいると見られていた校友会長松崎半三郎の罷免を策動し、ストライキの計画も具体化するようになった。

こうした状況を看取つた木村は、それまで彼の意を受けて学生に対する弾圧政策を実行してきた今村忠助学生主事に詰め腹を切らせることで事態を切り抜けようとしたが、トカゲのしっぽ切りに怒つた今村は、反木村の姿勢を鮮明にするようになった<sup>11)</sup>。

同書が出版されたのは、一九三四年。チャペル事件の

約二年前のことだが、当時の立教大学の学内情勢は次のようなものだったという。

「失敗に失敗を重ねた木村学長は、再び自己の名譽を回復しようとし、それには飽く迄弾圧主義で行かねばならないと彼一流の戦術を練っている。また一方反松崎派も、陣容を整へて、木村学長追ひ出しの策を立てている<sup>(13)</sup>」。

すでにこのころには、学内対立は抜き差しならない段階に達し、木村学長、反対派双方がお互いに追い落としのための機会をうかがっていたことがわかる。

杉浦貞二郎学長による、前学長元田作之進直系の久保田富次郎商学部部長追い落としに端を発する学内対立は、大学内だけでなく、校友会、ミッションをも巻き込んで複雑な展開を遂げ、その過程で杉浦の後任となった木村重治学長は、学内外から目の敵にされ、追い出し策が練られていたのである。

もちろん、同書は大学の「裏事情」をゴシップ的にとり上げたものとして、信ずるに足らぬという考え方は当然あるだろう。著者の大村八郎のプロフィールも不明である<sup>(14)</sup>。

しかし例えば、一九三二年八月に軽井沢で理事会が開催され、ここで杉浦から木村への学長交代が決まったといった、同書が触れている公的な事実関係は、基本的には間違っていない<sup>(15)</sup>。こうした情報は、当時公表されて

いたものではないので、著者の大村が、何らかの形で内部の情報提供を受けていたことは確かだ。だから、ここで描かれている学内の対立は、一方の当事者によるバイアスがかかっていることは否めないにしても、何の根拠もないことを書き散らしていたわけではないだろう。

立教出身とは言っても、長く官立学校に勤め、落下傘的に立教大学の学長に就任した木村は、聖公会の聖職者であり中学校長として長年にわたって実績を積んできた小島に対して、強い警戒感を持っていたのである。

こうした経緯を踏まえれば、一九三六年五月に、小島茂雄中学校長解職や「チャペル事件」といったスキャンダルがたて続けに起こったのも、別に不思議ではない。

もちろん、この時期には軍国主義的な風潮が強まり、政府による学校への統制が強まっていたことも確かだ。当時大学予科の教員だった縣康が「あの頃何か事を起さうと思う者は皇室問題を持出すことが一番有効であった<sup>(16)</sup>」と回想しているように、こうした問題を学内における政敵への攻撃材料に使ったという面がある。

そうした意味で、木村がチャペルの祭壇下で教育勅語を奉読したということを「不敬」と攻撃したのは全くの「言いがかり」だが、こうした「言いがかり」が力を持つようになったという点で、当時の時局を反映したものだとは言える。

だが、そこに至る経緯を鑑みれば、当時の立教大学内における派閥抗争が、こうした形で顕在化したものというものが、より本質に近い。

#### 四、ミッションとの関係の変化と学内の変動

この時期に、立教大学において学内抗争が目立つようになってきた背景として、ミッションとの関係が変化してきたことも見逃すことはできない。

一九二〇年代はミッションと各学校の間が、よきにつけ悪きにつけ密接だったのとは対照的に、一九三〇年代に入ると両者の関係は次第に離れていくようになる。もちろんその大きなきっかけとしては、満州事変とそれに続く日米関係の緊張化があったことは確かだ。

しかし、この時期に両者の関係を考える上で、それと劣らないくらいに重要なのは、経済的な関係の希薄化である。一九二〇年代のアメリカはおおむね好景気に恵まれ、日本のミッション・スクールに対しても比較的手厚い援助をすることが可能だった。特に関東大震災に際しては、その復興に東京のミッション・スクールは多くの援助を受けていた。

ところが一九三〇年代に入ると、世界恐慌の影響でアメリカは資金を援助する余裕を失ってしまった。これは、

アメリカの教会からの援助に頼るところが多かった各ミッション・スクールの経営に深刻な影響を及ぼしていた<sup>10)</sup>。ミッション・スクールに対するミッションからの援助がどの程度のものであったのか、具体的に明らかにするのは、実はあまり簡単なことではない。

比較的資料が整っていて、継続的な変化を捉えやすい関西学院の動向をみると、一九一四年の時点で、経常費に占める援助の割合が七四％であり、母教会の援助なしには全く立ち行かない状況だったことは明らかである。援助額自体は、その後一九一〇年代を通じて増額され、一九二一年には十万円となっているが、経費の総額はそれ以上に増えているので、援助の占める割合は五十一％に低下している。さらに一九三一年以降は、援助の絶対額も下がり始め、一九四〇年には援助額は四万円、援助の占める割合はわずか八％にまで低下している<sup>11)</sup>。

立教学院でも、一九三〇年代を通じて母教会からの援助が次第に少なくなっている<sup>12)</sup>。その分、日本人たちが経営に関わる必要性が増していたのである。実際、この時期には、日本人を中心とした新たな事業計画「立教学院拡張計画」が具体化するようになっていた。

日本人が学校経営の前面に進出してくるようになるのと、外国ミッションが経営の主導権を握っていた時代には目立たなかった、日本人同士による勢力争いが目立つ

てくるようになった。一九三〇年代から戦時期にかけて、立教以外のキリスト教学校でも、学内での抗争が目立つようになり、それが学校の存立にも大きな影響を与える場合もあった<sup>19)</sup>。

立教の抗争でも、校友会長松崎半三郎が重要な役割を果たしたように、次第にミッシヨンの統制が効かなくなっていく過程でもあったといえる。

いずれにせよ、立教大学では内部から後任の学長を選ぶことができなくなり、それまで立教とは直接関係のなかった前東京帝国大学医学部教授遠山郁三を、後任として選任せざるを得ない状況に追い込まれた。

だが立教大学では、その後も激しい内部対立が続き、一九三〇年代後半から戦時期にかけて経済学部を中心に深刻の度合いを深めていくことになるが、こうした状況とどの程度関連性があったのか、あるいは別の問題だったのかは、今後注意深く検討していくことが必要だろう。

## 註

- (1) 海老沢有道編『立教学院百年史』（学校法人立教学院 一九七四年）三五六頁。
- (2) 奈須恵子ほか編『遠山郁三日誌』（山川出版社 二〇一三年）五三〇頁。
- (3) 「立教に内紛 学長の後任で抗争」『東京朝日新聞』一九三六年五月十三日。

- (4) 「立教も動揺 小島中学校長罷免から校友に反学長の声」『東京日日新聞』一九三六年五月十三日、「文学部長罷免から 立教にも騒動」『読売新聞』一九三六年五月十三日。
- (5) 「立大生八百名 突如、盟休を決行 勸語捧読問題を蒸し返し 木村学長に辞職要求」『読売新聞』一九三六年七月二日。
- (6) 前掲「立教に内紛 学長の後任で抗争」。
- (7) 前掲「立教も動揺 小島中学校長罷免から 校友に反学長の声」。
- (8) 前掲「立教に内紛 学長の後任で抗争」。
- (9) 前掲「立大生八百名 突如、盟休を決行」。
- (10) 大村八郎『帝都大学評判記』（三友堂書店 一九三四年）一六二、一六三頁。
- (11) 前掲『帝都大学評判記』一八〇、一八六頁。
- (12) 前掲『帝都大学評判記』一八七頁。
- (13) あえてペンネームで執筆したという可能性はある。
- (14) ただし、同書では理事会の開催を八月二十二日としているが、実際には八月十二日に開かれている（立教学院八十五年史編纂委員編『立教学院八十五年史』（学校法人立教学院事務局 一九六〇年）三六七頁）。
- (15) 縣康「遠山先生追想」『立教』一七号 一九六〇年。
- (16) 「青山学院が敢然独立へ 米国の援助を辞退」『東京日日新聞』一九三三年八月三日。
- (17) 関西学院百年史編纂事業委員会編『関西学院百年史 通史編1』（学校法人関西学院、一九九七年）二八九、四六七頁。
- (18) 立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』（立教大学 二〇〇八年）一〇八頁。
- (19) 拙稿「戦時下のキリスト教学校」『青山学院昭和一八年事件』をめぐって『史苑』七一巻二号 二〇一一年。